

幕末明治の写真師列伝 第二十三回 下岡蓮杖 その二十二

ここでこれまでの連載で書き渡らした事を、ここでもう少し補足しておくことにする。

蓮杖がまだ横浜に居た頃に次のような新聞広告を出している。

「近来、世上に専ら写真行はれ、従て之を業とする者多し。茲に我師下岡蓮杖先生發明の言に曰く、写真鶏卵紙是迄舶来の桃色紙を用いたり。是を硝酸銀液中に侵入せば、其色少しく脱落して、終に原色より薄きに至る。然れば、液中に浸して、次第に色の濃くなる方法を感じ考す。譬ば、桃色鶏卵紙無之節に当りては、紅粉を液中に溶解し、白紙を浸すべし。尤、色の濃薄は、加減思ひに任せ依る。有志の諸君へ伝うべき而已 横浜下岡蓮杖門人記」(明治6年11月4日付『横浜毎日新聞』)

これは広告主を「横浜下岡蓮杖門人記」としているが、おそらく蓮杖自身による新聞広告と思われる。

明治7年11月26日付『東京日日新聞』には、ある相撲取りが写真を写して貰おうと蓮杖の横浜時代の写真館に行った時に、先客で居たイギリス海軍の将官と英語と日本語でやりあった時のエピソードが書かれているが、これも東京日日新聞が蓮杖から聞いた面白話であろう。

明治9年(1876)、蓮杖の油絵の見世物については次の新聞記事がある。

「下岡蓮杖さん油絵の見せ物などハ所謂学術展観場の類にして女中衆子供衆ハ申すに及ばず大人でも学者でも能々見物しておけばたいさう利益になりませう」(明治9年2月13日付『東京曙新聞』)

「余ほど評判が高いから、昨日ちょっと浅草奥山の電気展覽場の前に出て居る油絵茶屋の見物に行きましたが、成るほど、函館の戦争の絵も、台湾の合戦の図も、能く出来ました。何にしても大きな物で、壱つの絵が、幅三間に豎は七、八尺ぐらゐ、立って居る人物が三、四尺にも見えて、自然と大砲の響も聞こゆる様な心地して、黒煙の間から剣戟や旌旗がチラチラ見ゆる処は、実に見るも物すごき有様なり。台湾征伐の方は、石門の要害を打ち破り、牡丹人を追撃する処の図にて、もつとも妙なるは、新聞探訪の為に彼の地へ趣きたる弊社の吟香もその画中に立てり。その外は、日本にて油絵の元祖とも云ふべき司馬江漢ならびに門人の画あり。又、古今の名将、大儒等の肖像の額を多く掛け並べたり。是は近ごろ市中の写真屋にある家康公や藤原卿、菅公などの原本なり。元来、この油絵茶屋を出したるは、横浜の下岡蓮杖と云ふ人にて、元は伊豆の国の産なるが、曾て狩野董川の門に入り、画を学び、其のち、安政元年のころ、豆州下田に米国コンシュルの船が碇泊して居たる時、ヒウスケンと云ふ人より写真の術を学び、ますます研究して、始めて此法を伝へたれば、則ち、我が日本国の写真の元祖とも云ふべき名家なり。油絵は、始め米国のショーエル女史に学び、後は英国のワクマン氏に従って修行せり。爰に出す処の画像は、曾て狩野家に伝ふる処の古図を以て西洋画に模擬し、影照の原板に取りたる者だと申します。是等は開帳まいりや、花見の序に一寸と御覧なされても、随分お為に成りませう。茶代が只た一錢五厘で、外にも何にも入らぬとは、実に看板の通り御安息所だ。」(明治9年4月7日付『東京日日新聞』)と、東京日日新聞の記者は蓮杖の油絵茶屋を詳しく紹介している。記事中の“吟香”とは岸田吟香のことで、このことから台湾征伐の

パノラマ画は、従軍記者だった岸田吟香からその戦いの情報を蓮杖が受けていたことが判る。

「詣づれば花が降るなり浅草寺後ればせなる大油絵、小さきも交る油絵茶屋、さまざま見せて休ませて、ねだんも殊にれんちやう齊(中略)新聞紙上に顕はれし、乾魚の筆は世の中に、名も高橋の由一にて、薔薇花は横山松三郎が写真の余力に咲せし花、同じ門下の亀井兄弟、古人の像もうるはしく、皆夫々に尽くしたる、浅草ならぬ手際物(下略)」

(明治9年4月29日付『東京日日新聞』)と、この東京日日新聞の記事からは、明治初期の洋画家の高橋由一や蓮杖の弟子の横山松三郎、亀井至一がこの油絵茶屋にも協力していたことが判る。

明治10年(1877)、それまで教育の一切をヘボン博士に委ねていた養子の太郎次郎が、日米貿易のために自分は働きたいとの夢を持って、単身渡米した。森村市左衛門の経営する貿易会社「森村組」が英語に堪能な青年を求めていたことに応じ、その選に入ることができたからである。蓮杖は突然のことではあったがこれを許し、旅費や小遣いにとお金も用意して太郎次郎へ餞別として渡したのだが、太郎次郎は先方へ行けば金に不自由もないからとして、父の好意に感謝してこれを辞退したという。太郎次郎は森村組の一員として横浜からアメリカ行きの汽船に乗って行ってしまったが、この時、太郎次郎は18歳であった。

明治11年(1878)1月6日付『読売新聞』によれば、この頃、蓮杖は蒸気車雛形の見世物を計画中だと報じられている。木下直之『美術という見世物 油絵茶屋の時代』(平凡社、1993年)によれば、これは観客席を汽車に見立てて、風景の方を動かす「動くパノラマ」の試みであったかもしれないと述べている。「浅草公園地の下岡蓮杖さんが、此せつ製造ちうの蒸気車雛形は、実に妙な工夫で、凡二十尺ほどの形ちなれど、火を焚かずに走り、此法を以てすれば、三人乗りぐらゐの車は出来るで有らうといふ。此の雛形が出来あがると諸人へ見物をさせますと。」(明治11年1月6日付『読売新聞』)

「先頃より蒸気車の雛形を製造して居る浅草公園地の下岡蓮杖氏は、此節差わたし六尺ほどの風船を拵らへ、其中へ音楽の器械を仕込み、上へ登ると、自然に音を出す様に出来上がつて、近々に諸人へ見せるといふ。」(明治11年2月11日付『読売新聞』)しかしながら、この試みは失敗したらしく、結局は行われなかったようだ。

(森重和雄)



岸田吟香(下岡蓮杖撮影)
(日本カメラ博物館所蔵)